

没理想論争注釈稿（六）

坂 井 健

小羊子が白日夢^①

第一 小羊子の来しかた

智は毘盧の頂上を踏むといふとも信若し不及ならんには諸理を解しても諸実を證せず行ひは小兒の脚下にうづくまりて業火長く消えざるべしとかやこの義を俗解せば智及びて情及ばずとも謂ひつべし世に仏智見を開きて悟道を得たりといふものゝ大かたはいづれか此境の衆生ならざらん併しながら智だにいとく高うして諸理を解するに至りたらんは或は一学派の祖師となりて他の智不及が足らざるを補ひ間接に人間を教化すべきが若し智も情も不及にして曇れる古鏡におのが歪める影を映しこれを見て人間の真面目を看得たりと速断し白日晴天に眼を開きながら瞋睡し夢中に夢を説くものあらば誰か正面してこれを聴かん世にかゝる徒のはびこるこそ慨きことの限なれと或人のいへりける其言葉いまだ耳のはたに残れるにあな笑止や爰に手細工の管目鏡に果知らぬ蒼空を窺き見て漫言をさへづる鳥呼の白徒あり本名をば何といふらん綽名を羊とも又唐様に小羊子とも呼ばれけるを好名得たりとや思ひけんさながらをのが表徳として宣りあるきけるにぞ人々かたはらいたがりける、さるは彼れが性の優柔と意地無げにて何事にまれ人に逆ふことを厭へるが柔毛といふ獸に似たればなるべししからず

ば彼れが支幹の末なるとし、ごう要無き筆いぢりして紙あまた喰ひ減らしければなるべし。此れもの生れながらの鈍根にして何一つ得たるところとは無し。固より博く涉獵して多聞を得んと樂ふ心もなければ沈潜反復して心通默識の緒を求むる勇氣もなく、習ひ性となりし大無精、精進の勤日々に怠り、学問大便利の代に生れながら漢土に名たゝる聖賢の書も繙かざれば汗牛充棟と数多き泰西古今の哲学の大宝藏の鍵にも手は触れず、都の場末にくすぶりかへりて日々閑居に為すこともなく、流石に不善を作らざれど、いまだ片善をも修したる跡なく、碌々たる大俗のたゞずまひ、春の花の錦繡夕の風に檻褸となりて軟泥に委し、冬の雪の白光浄土朝の日影に溶初めてまたゝきの中に消えぬくを二十年來目の前にうッかりぼんと見送りて花は赤いとみづからは知りたれど人に向うて説くこと能はず。雪は冷し、白妙の妙なる理、六花と乱れてそが鼻の先にちらつけどあゝ冷いと自知するばかり。啞子が黄檗をねぶれる如く、他人にその理を語る口無し。小児が羊羹の甘きを知りて羊羹の何たるをトンと知らぬと同然の暗黒座敷を這ひまはりてこゝらに一理屈ありさうぢやと白痴が途惑ひして早附木を探る途轍方も無き揣摩想像、いつの間にやら羽を生して富士の人穴に棲むらんやうの大蝙蝠と化けおほせ。六畳敷の無人の書齋を縦横無碍に翔けまはり固より皆目見えざれば思はずも古今の書籍にぶツツかり頓の響に応ずる瘤を額に撫でゝこれを頓悟と我ぼめの苦笑ひ、天井に衝当りて翼を折り鼻先を痛め平伏りて腰たゞざればこれが漸々漸機の妙智力急いては事を仕損ずる、逆境即ち順境なり窮すれば則ち通ずる道理泣くなゝと我とわが心あやしき楽点三昧、次第に我ぼめ増長なし下手が横好く戯作者々流の成れの果とてまことや古人もいひけらし遺損ッて批評家の仲間入りし助言の一つ二ついひ習ひ花の赤いをも得説かぬ口で詩歌小説の褒貶沙汰智情不及の悲しさは人の道も斯道もその根底の玄妙旨訣は色にも越えたり声にも越えたる其前一句は聖も不伝の甚深無量拈華微笑の玄又玄と昼夜おちず見る夢の其夢の間にもかいくれ見ざれば象の通りし足跡の尺取りて見事象を知ったかぶりの高慢の鼻ひこつかせ我もおぼろの小理屈を明白にいふ口無ければ雲握むやうな比喻言葉明治文壇を基盤と見たてゝ詩歌小説の魂胆を機会的遊戲と混視にし基將棋うちませたる入法外のさしで口、五ならべの初身者をつかまへても初めより八段に桂馬飛させんと肝を煎りまだ歩もつかぬ盤面に指ざしてソレ王手と氣をいらち烏呼此堂々たる手の裡に

金は無いか銀將無きかと慨がり今にして断らずば末を奈何と懸念貌仔細らしく意味取ちがへて濫用する困甚詞の粘、塗、抑、約いと五月蠅し案ずるに詩人は生ると古人もいひし天稟ならんは教へずとも大なる詩人となりぬべし野に生ふ花卉の麗しき青山の自然の風姿白水のおのづからなる情韻豈人間の所為ならんその底蘊は天稟にあるべき詩歌小説を杓子定規の理屈詰にて作りいださんこと竟東無し理屈でこねては新粉でもうまい格好は出来ぬ例所詮は手錬と胸とにあるを生ざとりの指南、邪魔になるとも尽未来益に立さうな苦もなしそれも敵手の質にこそよれ当りもつけず鉤もつけぬとんだ気まぐれの太公望が道楽一方の釣を見てさてはわるし斯うしたものと釣竿のしなひ塩梅潮時の講釈に舌を爛し太公望には五月蠅がられ自身の隙はつぶし頗の作用太義になりてやうく腹の北山風ぞつと身に染みて心づくとは譬にもいふ他人の釣に見惚るゝ白徒、馬鹿の骨頂とは是なるべしと人にもいはれ我れにも気づきあゝ誤ツたわるかりしとさばかり我ぼめの小羊子も少しばかり目が醒め暫らくの間おのが名にあふ屠所の羊のしほれかへりいかさまな自家が鼻の端の蠅から先づ逐うてかゝらねば謎もいへた仕儀では無かりき戒行その身に備はらねば法を説けども人の聞かぬは無礼な奴と憚めばこそとさう思ふが此方の大なる僻見なり活きたる模範を見せぬ説法古来効のあつたこと無し道德の根源も美術の元も皆情なり先づ其情を化せざれば千日読誦の妙法蓮華も花さきばかり身は入らず何の詮なき謔語なり夫れ理は唯智力に訴ふべし傍ら情に訴ふべき活きたる模範の出来ずあらば道德界は理屈の鬩諍宗論の修羅となり詩文世界の名聞餓鬼はますくおのれが誠を没して徒に彫蟲の奴となりぬべし例の偏執の頑機いつの日にか断滅せんさてまた天成の詩人に向ひて生中の小理屈を指南せんは猿廻与次郎に聞きかぢりの老荘が教説き聞かせて一時の惑ひを醸す譏、また望無き戯作者に古代作者の手柄話はおのが先祖の鍬形兜、土用干の日に着かざつて我身の光と誇るに似て誰かはこれを教えと聴かん況んや、我にもおぼる月の此朦朧たる煩惱の疊背負つた其面に映る諸法相、一つたりとも真実とせられうや我肉は朽るとも我魂を死なじと定めて限無き大欲の海に浮びけふより無言の修行門に入らん物言へば唇寒しとや我れは唇の寒きを厭はず、我偏執の胸麻声に法ほけきやうと鳴く鳥のその妙音を溺等せて聞おとさんかの取越苦勞、さてく我ながらいしくも工風しいだしたり Silence Silence と又候や持前の増長菩薩

石の地藏のやうになりて物もいはねば人も訪ねず見ざる聞かざる誓願の猿智恵夜は夜もすがら昼はひねもすに方寸海をやりかへし漕廻り去年の我を破しては今年の我一段高く昨日の我れを説消ては今日の我れ傲然たり絶えて他人に語らざればわが大謬を覚るべき伝手も無く夢にだに文とせざれば語と意との矛盾に氣のつく機無しされば妄想其はじめ混沌として海とも山とも地とも何のわいだめなかりける無尽蔵の妄想いつともなくうづきたち沸かへりてやう／＼に一団の大団子如き形したる妄想の塊とはなれりける、此の妄想の塊を何と名づけて呼ぶべきか、小羊子の理に昏き何を見ても謎のやうなる名をつけて呼ぶ癖ありさるは道理に疎きが故に自身が感じた保をいふなり雪を指して白きもの、花を指して赤きもの、それより外の名ハ知らず悉皆稚孩の振舞なりされば件の塊をも白日の夢ぢやとばかりにて名もつけねば割ッても見せず見せぬ故に何とやらゆかしいやうに思はれて何がさて見るは放棄遊んでこまそと物好の編輯係何のたれ、雪の解ゆくきのふ、雪女の正体でも見届る心になつて米屋と漬物屋の外入る可らずと書いて貼つたる片折戸邪見無法に押あけて頼まうとこそ音信れけれ

(1) 小羊子が白日夢・『早稲田文学』九号(明治二五年二月一日)発表。「第一小羊子の来しかた」、「第二小羊子の愚痴」からなる。「烏有先生に答ふ」(其一)、(其二)と同時掲載。

(2) 智は毘盧の頂上を踏むといふとも信若し不及ならんには諸理を解しても諸実を證せず行ひは小児の脚下にうづくまりて業火長く消えざるべし・「毘盧」は毘盧舍那仏。遍照、光明遍照、大目遍照などと訳される。「毘盧の頂上を踏む」は、禪では比較的良好よく使われる表現のようで、「仏向上の極地に至つても、なおとどこおらないでふみ越えることにある」(『禪字大辞典』大修館書店、昭和六〇)のだという。「信若し不及ならんには」以下出典未確認。この箇所では、「智及びて情及ばず」(信念)と「諸実を證する」(実行)が「情」の中になしくずし的に引き受けられて、注意したい。というのは、このため生じている「智」「情」の二項対立が、以下の論で重要な働きをしているからである。

なお、鵑外は、「早稲田文学の没理想」(明治二四・二五)において、「理を談ずるを聞くことだに能はざる世の昧者に、成心あらせじと願ひて、唯実を記したるのみを見て悟れといはむは、おそらくは難題ならむ。」と述べ、仏教的悟りを批判し、論理の重要性を説いている。禪によりつつ「理」を斥け、「情」を重視するこの書き出しは、

鵬外の主張と真つ向から対立する形になっており、一種の開き直りにも見える。

- (3) 世に仏智見を開きて悟道を得たりといふもの、大かたはいづれか此境の衆生ならざらん・「智」方面で悟ったという人がいたとしても、「情」の方面、すなわち、信念と実行は伴わない、というものであるが、「智」に対して懷疑的な逍遙の文脈からして、ここでは主に実行の伴わないことをさすと考えられる。

- (4) 智だにいと／＼高うして諸理を解するに至りたらんは或は一学派の祖師となりて他の智不及が足らざるを補ひ間接に人間を教化すべきが・逍遙は、「理」を斥けるとはいいつても、全面的に否定するのではない。偏った論理のみを否定しているのであるから、これは論理的矛盾ではない。

- (5) 曇れる古鏡におのが歪める影を映し・「古鏡」自体知恵の喩としても用いられる（「正法眼蔵」・「古鏡」）が、ここでは「曇れる古鏡」で歪んだ心の比喩としてとりた。

- (6) 夢中に夢を説く・「正法眼蔵」・「夢中説夢」では、この世界を夢と観念した上で、夢を説くので、肯定的に用いられるが、ここでは夢の中で夢を説くほどに当てにならないことのたとえ。なお、仏教では、われわれの認識可能な世界そのものが夢であつて、非本質的なものとされる。

- (7) 世にかゝる徒のはびこるこそ慨きことの限なれと或人のいへりける・「烏有先生に答ふ（一）」（明治二五年二・一五）で、逍遙は、「師父の説く所をまこととして未だ一たびも見ざるうちより他は悉く蛇蠍と信じてかりそめにもこれを顧みざるなり諸学派の末流は概ね是なり（中略）その師の説に惑溺していよ／＼濁流におもむかん人の身の行く末のいと慨短し」とある。つまり、偏った自分の意見を盲信して、当てにならない批評をする連中がはびこっていることを批判したのは逍遙自身でもある。にもかかわらず、この直後「其言葉いまだ耳のはたに残れるに」と続き、「小羊子」が当てにならない批評を始めました、ということだから、二重の意味での自嘲になっている。

- (8) 手細工の管目鏡に果知らぬ蒼老を窺き見て・「管を以て天を窺う」を踏まえた表現。「手細工の管眼鏡」は、完備した理論的基盤を持たず、独自の思索によつてたどり着いた自己の思想を手作りの望遠鏡に例えた卑下だが、期せずして、借り物のハルトマン美学によつて論を進めた鵬外への皮肉にもなっているよう。

- (9) 彼れが性の優柔と意地無げにて何事にまれ人に逆ふことを厭へるが柔毛といふ獸に似たればなるべし・柔毛は羊の異名。逍遙は、当時の文壇に横行した感情的な毀譽褒貶に過ぎぬような批評を厳しくいしましめたが、そのような毀譽褒貶を嫌った自己の態度を卑下していったもの。

- (10) 彼れが支幹の未なるに・逍遙は、安政六年、すなわち一八五九年生まれだから、猪年生まれの手筈。

(11) 沈潜反復して心通默識の緒を求むる・心を落ち着け、何度も読んで、いわず語らずのうちに悟ること。いわゆる、読書百遍である。

(12) 汗牛充棟と数多き泰西古今の哲学の大宝藏の鍵にも手は触れず・「汗牛充棟」は柳宗元「唐故給事中陸文通墓表」の「其為書、処則充棟宇、出則汗牛馬」による。家の棟木まで届き、それを引き出すのに牛馬が汗をかくほどのたくさんの書物をいう。

(13) この一節は、鵑外が「早稲田文学の没理想」(明治二四・一一)で、「烏有先生」の口を借り、さまざまな西洋の思想家の名を上げてで大論陣を張ったのを受けての卑下であり、と同時にひそやかな皮肉にもなっている。

(14) 日々の閑居に為すこともなく流石に不善を作らざれど・「小人閑居して不善を為す」をふまえたもの。

(15) 春の花の錦繡夕の風に襦袢となりて軟泥に委し冬の雪の白光浄土朝の日影に溶初めてまた、きの中に消えゆく・どちらも美しいものの儚いことをいつたもの。現実には夢幻のようだということ。

(16) 雪は冷し白妙の妙なる理六花と乱れてそが鼻の先にちらつけどあゝ冷いと自知するばかり・前の「冬の雪の白光浄土朝の日影に溶初めてまた、きの中に消えゆくを二十年來目の前にうっかりぼんと見送りて」を受ける。つまり、悟りのための環境は整っているのに、ちっとも悟らない、という卑下。「六花」は結晶が六角形であることから、雪の異称。

(17) 啞子が黄檗をねぶる如く他人にその理を語る口無し・「啞子苦喫瓜」(啞が苦い瓜を食べて、その苦さを人に伝えようとしても伝えることができない意。体認した境地は言葉で言いあらわすことのできないこと。『禅学大辞典』参照。)を踏まえるか。「黄檗」はきはだ。ミカン科の落葉高木。樹皮は健胃生薬で苦い。

(18) 早附木・マツチが我国で一般的になったのは、明治九年だという。(『国文学明治・大正・昭和風俗文化史』学燈社、平成五・五)ここで逍遙が引いても不思議はない。

(19) 途轍方も無き揣摩想像・直接的には、次の「固より皆目見えざれば」を導く。蝙蝠は目が見えないからである。だが、間接的には、後の「象の通り足跡の尺取りて見事象を知ったかぶり」に続くか。盲が象のあちこちに触り、それぞれ違ったことを言ったというたとえ話を連想させるからである。

いつの間にやら羽を生して富士の人穴に棲むらんやうの大蝙蝠と化けおほせ・「富士の人穴」については、中世・近世においては、かなり知られた伝説がある。鎌倉二代將軍頼家に命ぜられた仁田四郎が、富士の人穴に入り、美形の女房、毒蛇、童子と変ずる富士山神浅間大菩薩の案内によって、地獄を見物して帰るというもので、富士講の

隆盛とともに全国に広まった。(小山一成『富士の人穴草子 研究と資料』昭和五八、文化書房博文社) 富士の人穴に蝙蝠が棲むという伝承は、早くは『吾妻鏡』に見えるが、明治においてよく読まれた文献では、井沢蟠竜の『広益俗説弁』にその記述を見出すことができる。白石良夫氏が指摘するように(『広益俗説弁』平凡社、一九八九の解説)、森鷗外も、『広益俗説弁』の愛読者であり、明治三二年九月二八日、熊本の本宿岳寺にある蟠龍の墓をたずねている。「富士の人穴」を引く時、逍遙の脳裡にもこうした伝承があつたであろう。

(20) 固より皆目見えざれば・先の「揣摩想像」より続き、蝙蝠だから目が見えないという表面上の意味の裏に、何が真理であるかを知る眼力がまつたかないという卑下の意味を含める。

(21) 頓の響に応ずる瘤を額に撫で、これを頓悟と我ほめの苦笑ひ・ぶつかった「頓」の音と「頓悟」をかける。

(22) 漸々漸機の妙智力・「漸々」と「禅」をかける。

(23) 我とわが心あやしき楽点三昧・「楽点」は「合点」の意だろうが、「楽」の字を当てたのは、「我とわが心あやしき」から、次の「次第に我ほめ増長なし」に続く文脈で、頓悟をしたと増長した小羊子がはしゃいで喜んだ、という自嘲のニュアンスを加えたものだろう。

(24) 人の道も斯道もその根底の玄妙旨訣は色にも越えたり・「人の道」は、一般的に人間の生きる道、「斯道」は、これに対して文学の道をいつたもの。「旨訣」は、すばらしい奥義。「根底」を「どんぞこ」と読ませているのは、戯作者流のおどけ。「色」は現象。人生の道も文学の道も、その奥義は目に見える現象を越えているの意。

(25) 声にも越えたる其前一句・「色」にも越えたり」を受けて「声」にも越えたる」といつたものだが、ここでは言葉で言い表わすことができないとの意味。「其前一句」は暗に「没理想」を指す。「没理想の語義を弁す」(明治二五・一)に「造化は(今人の智の及ぶ限りにていへば)無辺また無底なり。此の無底無辺のもの、此を名づけて何と呼ばん。

(中略) 仮に名づけて没理想といふ。」とある。

(26) 聖も不伝の甚深無量拈華微笑の玄又玄・拈華微笑」は、釈迦が無言で花をひねったのを見て、他の弟子は理解できなかつたが、摩訶迦葉だけが微笑んだ。それを見た釈迦が仏法のすべてを迦葉に授けたと語ったとの故事を指すが、肯定的な引き方ではなさそうだ。(たとえば、日蓮は、『蓮盛鈔』において、拈華微笑を引き、以心伝心による悟りを重視する禅宗を批判している。) 言い表わすことのできない「没理想」を自嘲的に言つたものだろう。

(27) 昼夜おちず見る夢の其夢の間にかいくれ見ざれば・前に文壇の独断的な批評家たちを「夢中説夢」として批判しているところへ、このような言い方をしているわけで、自己を批判した対象と同列におとしめる効果を持つ。

- (28) 我もおぼろの小理屈・逍遙の別号「春のやおぼろ」にかけて、はっきりしない小理屈と卑下したもの。
- (29) 善將棋うちまぜたる入法外のさしで口・逍遙は、たとえば、『小説神髓』において「小説を綴るに当りて、よく人情の奥を穿ち、世態の真を得まくほりせば、宜しく他人の象棋を觀て、其局面の成行をば人に語るが如くになすべし。」などと、将棋をたとえにして小説を論じている。
- (30) 囲碁詞の粘・塗、抑、約・「古事類苑」遊戲部二、囲碁の項に「囲碁四角鈔」に「囲碁に三十三法あり」として、その中に「粘（つぐ）」「約」（おさめる）とあげられている。さらに、「右のほかにつかふ詞字」として、二十六の単語があげられ、その中に「塗（ぬる）」「抑（おさめる）」とある。
- (31) 理屈でこねては新粉でもうまい格好は出来ぬ例・自己の思想を団子にたとえたもの。後の、「一団の大団子如き形したる妄想の塊とはなれりける」に続く。
- (32) 当りもつけず釣もつけぬとんだ気まぐれの太公望が道楽一方の釣りを見て・見当もつけずの意である「当りもつけず」から、釣りでいう「アタリ（魚が餌に食いつくこと）」を引き出し、そこから太公望が渭水で釣針もつけずに釣り糸を垂れていたという故事を導く。
これを批評家としての逍遙の文脈にもどすと、道楽として文学をやっているものに、いらぬ差し出口をしていたということになる。
- (33) 釣竿のしなひ塩梅潮時の講釈・「潮時」は、釣りに適した潮時の意だが、「しなひ塩梅」の「塩」から引き出された言葉でもある。
- (34) 自身の隙はつぶし・直接には、鵑外以外の批評家に対して批判をすることのために「隙をつぶし」ということだが、暗に、鵑外との応酬についてもほのめかすか。
- (35) 太義・大儀に同じ。
- (36) 腹の北山風ぞつと身に染みて心づく・「腹の作用太義になりて」（講釈が過ぎて、疲れた。）から、「腹が来た」（腹がすいた）を引き出し、「北山風」をかけた。「北山風」が身に染みて、はじめて空腹に気がつくほどに他人の釣りに見とれていた、ということ。「馬鹿の骨頂」ということになる。
- (37) 自家が鼻の端の蠅から先づ逐うてかゝらねば謎もいへた仕儀では無かりき・「小羊子」の鼻先にたかった蠅は、前後の文脈からは、文壇一般の批判と受け取れるが、鵑外に対する皮肉ととれないこともない。
- (38) 法を説けども人の聞かぬは無礼な奴と僻めばこそさう思ふが此方の大なる僻見なり活きたる模範を見せぬ説法古

来効のあつたこと無し・「烏有先生に答ふ（其二）」で逍遙は、以下のように説いている。明治文壇にはびこる小理想家は、「他の言ふ所は仏、菩薩の説法と雖もこれを外道の声となし惡魔の姿となし」初めから聞こうとしない。したがって、単に、議論をしても無駄なのであつて、議論をする下地として、「真美の説法を聞かんとする初発心（傾向）」を作ることが重要である。そのためには、「衆美を一同に集め」、「美といふものゝ世界に遍きことを覓ら」せ、自分たちの意見だけが正しいのではないと心づかせることが必要である。その手段として、明治文壇の「一大博物館」を作ろうと、公平な「記実」を始めたのである。この箇所での逍遙の意図も同じである。せつかく正しいことを言つても聞かないのは無礼だと思ふのは間違ひで、實際の見本を見せなければ、正しいことも受け入れてもらえない、というもので、だから、受け入れてもらうための環境を作らなければならぬ、という文脈で続く。

(39) 道德の根源も美術の元も皆情なり・ここで冒頭の智と情の二項対立が生きてくる。道德でも美術でも、智よりも情こそが大切なのであつて、その情に訴えるのには「活きたる模範」が必要であるとの論理である。だが、冒頭の「智は毘盧の頂上を踏むとも」以下の引用は、あくまで修行者主体の信念の問題をいつたものであるにもかかわらず、ここでは同じ情の範疇のもとで、説法の受け手の心持ちの問題にすり替えられている。

このあたり、自身理屈を越えた悟りによつて真理を会得しようとする一方で、美術は真理の感情による直接の感得であり、そのためには小説は模写でなければならぬとして、主体の認識の方法を受容者の認識の方法へと応用しようとした二葉亭四迷の主張を彷彿させる。（拙稿「二葉亭四迷『真理』の変容——仏教への傾倒——」、『新潟大学国語国文学会誌』三二、平成元年・三、参照）

(40) 千日誦誦の妙法蓮華・千日間法華経を唱える法会である千日講を指す。

(41) 花さきばかり身は入らず・「花さき」は「花咲き」と「鼻先」、つまり、最初の少しだけの意とをかける。「身は入らず」も、熱が入らないの意と、「花」からの縁語で「実はいらず」を導き、成果が上がらないの意図をかける。

(42) 詩文世界の名聞餓鬼はますく・おのれが誠を没して徒に彫蟲の奴となりぬべし・「彫蟲」は、「彫蟲篆刻」。漢の揚雄が若い頃美麗な賦を作っていたが、のちに、小さな虫の彫刻を作る子供の遊びと同じことだとして、賦を捨てたという故事に基づき、文学で些末な技巧に走ることを。また、此末な学問を卑しめている。ここでは、偏った見方しできない批評家が、些末な問題に拘泥していることをいう。

(43) 猿廻と次郎・「与次郎」は非人頭の名称から転じて、乞食一般。「猿廻と次郎」は、猿廻しをして物乞いをするもの。(44) 望無き戯作者に古代作者の手柄話はおのが先祖の歟形兜、土用千の日に着かぎって我身の光と誇るに似て誰かはこ

れを教へと聴かん・逍遙が『小説神髓』で説くような近代小説を目指そうともしない戯作者にシェークスピアのような作者を賞揚して見せても、自慢とばかり思うだけで、親切な教へと聞くものはいない。ここでは、逍遙は英文学者として、戯作者に対し、自分の身を西洋の側に置いている。「我身の光と誇るに似て」は、それを端的にあらわす表現だろう。戯作者的でありつつ、戯作者とは一線を画す、当時の逍遙の文壇中での立場が覗えよう。

(45) 我にもおぼろ月の此朦朧たる煩惱の曇背負った其面に映る諸法相、一つたりとも真実とせられうや・「おぼろ月の此朦朧たる」は、逍遙の別号「春のやおぼろ」を踏まえる。自分自身の主観も偏ったものだから、自分の考えを真実とすることはできない。したがって、「無言の修行門に入らん」ということになる。

(46) 我肉は朽るとも我魂を死なじと定めて限無き大欲の海に浮びけふより無言の修行門に入らん・逍遙は、「文学の修行に關しては、無限の慾を持ち、無限の旅途に上らんと思へり。我が魂ひは無限を涉りて百たびも休息せんと思ひ、又百たびも運動せんと思へり。現身の、旅中で死なんことは、もとよりの覺悟なり。無限の旅に上る者は、此の肉体にあらずして此の魂ひなり。」(『時文評論』村の縁起、明治二五・三)と述べている。現世で真理をつかむことを放棄するとともに、真理追求のための努力はゆるめない。いつか真理を明らかにすることができると口が来ることを楽しみに、そのための帰納の材料を集めることに専念し、余計な議論はしないことにしよう、という考えである。ここにも二葉亭との類似が見られる。(39)の拙稿参照。

(47) 我偏執の胸麻声に法ほけきやうと鳴く鳥のその妙音を溺等せて聞おとさんかの取越苦勞・「法ほけきやうと鳴く鳥」は篤だが、もちろん「法華経」を指す。この箇所は直前の「物言へば唇寒しとや我れは唇の寒きを厭はず」を受けていて、余計な災いを恐れるがために黙っているのではなく、自分が勝手な主張をしたことで、真理を見誤らせることを心配して理屈をこねないのだ、という意味。

(48) 増長菩薩石の地蔵のやうになりて・増長して菩薩になった気で、石の地蔵のようになって、なにもいわないで、の意。

(49) 絶えて他人に語らざればわが大謬を覚るべき伝手も無く夢にだに文とせざれば語と意との矛盾に気のつく機無し・逍遙は、「没理想の語義を弁す」(明治二五・一)において、「没理想」という述語が、「造化」に対して用いる時と「詩文」に対して用いる時とで意味がやや違いがあるのに、こうした違いを無視して論を立ててしまったと反省し、弁解している。

(50) 無尽蔵の妄想いつともなくうづきたち沸かへりてやう／＼に一団の大団子如き形したる妄想の塊とはなれりける・

「無尽蔵の妄想」は、前の「昼夜おちず見る夢の其夢の間」になったことからの続き。(27) 参照。「一団の大団子」は、「理屈でこねては新粉でもうまい格好は出来ぬ」を受けたもの。(31) 参照。

(51) 小羊子の理に昏き何を見ても謎のやうなる名をつけて呼ぶ癖あり・逍遙の発案になる「没理想」という術語をさす。これを鴉外が「無理想」と勘違いしたことに、没理想論争の大きな原因があるが、逍遙に言わせれば、「没理想」とは、「無理想」ではなく、有「大理想」ともいうべきだが、その確信がないので、かりに「没理想」と名づけたのだという(「没理想の語義を弁ず」、明治二五・一)。なるほど、謎のような名ではある。

(52) 道理に疎きが故に自身が感じた俵をいふなり・逍遙の謙遜だが、烏有先生の口を借りて大論陣を張った鴉外への皮肉にもなっている。烏有先生に答ふ「からもうかがえるように、逍遙の哲学的知識はあなどれないものがあつた。件の塊をも白日の夢ちやとばかりにて名もつけねば・小羊子が真昼の夢」という題名の由来。没理想の論を「真昼の夢」と位置付け、卑下しつつ、その由来を説き、鴉外の論難の不当性をほのめかしている。

(54) 見るは放楽遊んでこそ・「見るは法楽」は、見ることは楽しみだの意だが、特に女郎買いについていい、見るだけならただであることをいう。ここでは、「白日夢」の正体を見物するだけなら、ただであり、楽しみだの意で、物見遊山に例える。

第二 小羊子の愚痴

来て見れば富士の高峯も高からずましてや裾野の山々を究知らぬ雲井の遠きに比ぶれば賤が屋の障子の棧に積るちりひじにも劣るべし(1)。「白日の夢」と名づけたる小羊子が妄想の塊正体を見れば六才の頑童がこせへたる雪の達磨の生がたまりなるよりも小さかりき(2)電気の発るまで掌摺りて懇望して見せて貰ふたはこれかとばかり編輯員笑止がり尚念のため手に取りて見んとすれど固より幻のたぐひなれば微分子と微分子との間だつなかりたるやうにてつな取いだし程をはかりて見んとすれど固より幻のたぐひなれば微分子と微分子との間だつなかりたるやうにてつながりなく朦々朧々として縦からも横からも根から焼点の据処なし(3)しばしこそあれ編輯員もほうと我を折り精根きらしこれはまた如何したもの、成らば御主人が不可思議の利劔にて解剖あつて後学のため、一通り内面の組織構造拝見許容ありたし斯やう遠見仕つたところまことに古今稀有の神品何だか薩張合点まるねどかたじけな

さうにて随喜の落涙禁めがたし理由を聴けばといふ本文もござれば一段の有難き経験のため是非に御講釈切望の至極と小羊子が灸^①処すッかり見透しのうらをいへばそれと氣取ッてか氣取らずか小羊子そろ／＼と小鼻おごめかし隠者好みの咳^②二つ半ばかりしてお解りあるまじきが当然なりこれはやつがれが一時安心の方便のかたまり人さまに解らう筈もなく解ッたとて益にたとう筈もなし元来やつがれが口に蓋を仕マッタはおのが思ふ所を方便と思へばこそなれこれが真理とみづから信ぜば緘黙して居られた義理で無し古來何処の国にも悟道徹底したやうなこゝといふて跡は野となれ山となれといはぬばかりに山籠して果た人も多いげに伝聞いたしたがそれは自僣の真中山^③ 峠まで通越して人間の義理の柵、大井河ほどに見残した薄情の骨頂ではあるまいか^④聞きかぢりの名をならべるも耻かしくござるが釈迦耶蘇孔子マホメットその他ひとりとして聖人といはゞ人で化益に力を尽されなんだ人は無しこれはさもあるべき筈案ずるに身にそれだけの徳は無くともみづから善しと信じた上は手を束ねてあるべきならず自身が力を憚らずとも異端雲霞と沸く娑婆の修羅闘場へ切ッて出て衝いて衝きまくり叶はねば同胞の馬前にて討死する分のこと、其の時の自信家の心持ちは楠廷尉に何劣るべきや七生まで生れかたりても此の志を貫くべしといふ不退転の意気込あるべき筈なり平田篤胤が神道談義、清浄教派が偏屈もかたよりたりといはゞいへ自ら信ずる所を行へる其操の高きこと八天をも摩すべしカーライルの談命ミルトンが新教的天地想いづれも彼等が理想の談義恐らくは大造化を掩はざらんが天上天下此理想の外更に一つの理想もなしと金輪際より生ぬきたるやうの自信の獅子吼いと尊し苟もみづから信ぜばげに斯くぞあるべきそを行ふに当たりの手段にこそ選びはあれ緩急疾徐間接直接の差別こそあらめ同胞化益の大誓願の大白信に伴はざる可らざるや一なり若し此大誓願些も無うして大白信を持つる輩あらばそも是を何とかいはん人間の廃物といはんも誣言にあらざるべしさればやつがれが自信をいふことのいと尊きを知るものから巨獣の尻尾搔撫て忽ち巨象を知れりと做し之を虎豹と比べても見ず犀獅子水牛海馬のたぐひ其他巨なる獣は新古大陸に数多かるに絶えて比照の労をも取らで我れはもはや大象の筋肉を刮き骨を折いて甚深の秘密を證得せりと我をあざむき他をあざむきて宣りあるき他の象論と抵触してはじめは互ひに理を闘はし中ごろは偏執を闘はし末には瞋恚を闘はす如是輕信

の茶毒^⑩をも知り元よりかゝる争ひは学者の上にはいと稀にて其稀なるだに争の鬭瞋恚に及ぶは更に稀なり若夫純理の鬭ひは智慧啓発の大機關一日も無かる可らずわが『白日夢』の塊もそが尽る期無からんを望めりこは後段にて申すべしさて自信のいとも尊くして救世の良薬たるべきこと併に輕信の極めて毒あることはいともく明白にして人間医を俟たでもしるければこそ古今の物識といふ物識学者はおふむね懷疑家ならぬは無く後に大自信の人となりし学者も多年懷疑の境にありて心眼を森羅の法界に馳せ沈思瞑想の果成りて漸く理想を作りしなりとか案ずるに宗教家には顯正破邪の拳双つながら熾なれど大学者には破邪の論ははじめより熾なるも顯正の説話割合に後れてあらはるゝは大自信の成立に此れ彼れ先後のあればならんかそれは学者の上なれど並々の詩人文人の上にもそが持ち前の異同によりて信の先後遲速はあり夙に一道の信を得たらんは鬱勃たる情懷を事に感じ物に触れて詠出す其中にいたく傑れたらんはミルトン、シエルリの墨をも摩すべしこれ皆理想の詩歌にしていと広き意味にていふ抒情詩といふは大むね此たぐひなるらんかしそが形は古しへのエポスの形にしたらんもドラマの形したらんもあるべけれど所謂上乘のドラマの形といふ際はかゝる者流の作には見えずさてまた信を得かねたるは八万煩惱の繁きに撃たれて眼くるめき天の一月影万水に浮ぶなりと口ではいへど統括めて證ずる智慧の縄切れて無底の井戸にをちこちの餓鬼惡太郎^⑪にも笑はれ魂の無い奴と後ろに目無き一ツ目小僧が悪たい幽霊のやうにお手前は腰が無いとぬかざはぬかせ迷ふといふは悟の裏道、煩惱即ち菩提樹の此藥の生ひ長ちて花咲かん日を俟つ間の内職になふ縄梯子これは其後菩提樹が億万由旬延びくゝて大天上に届かん時に多ちらおちら攀昇らん其用心の方便なり他人に取りては菊五郎が舞台で用ふる竹梯子の短きよりも短くして何の益にもたゞざるべけれど我等に取りては一葦の葉船の浅ましきまでさゝやかなれど無辺の海を渡らん料なり夫れ物の用はその主の性に應じて成るものなれば石見銀山鼠取泥棒猫を禦ぐに由なく雀を威す山田の案山子弓引きしぼり立ちけらし立ちけらしが小山田太郎が武者目には御大將が咳の一つばかりの効目もなかりきさればわれらが方便門もほんのわれらの犬くゞり羊が通ふ背戸の小途のむさくろしき世の貴人の目に触れんや語るとも用なかるべしいふな維摩の室ならなくに無言三昧^⑫沸く妄想の凝り成せる達磨に似たる夢のかたまり辛氣くさゝにころがして行くとも無

しに往ぬる日の逍遙松風颯と落瀧津瀬に影映る蘿月⁽⁴⁰⁾を友に塵の世に行ひ澄す道士が柴の戸、突あたりて心づきやをら見込む竹椽に琴の音のいとゆかしくぞきこえけるその時やつがれ思ふやう我れ若し此塊をまろばしてかばかりの道来らずば此声聴くべき便なかりきさるにても只管に沈黙と思ひ込みしは我しらず我ほめの病を長ずべきいとあしき縁なりき⁽⁴¹⁾斯く心づく上からは烏有先生が此琴の音を善智識の引導といたゞきてけふよりいでや口を開かん望とあらば此妄想の塊実験にそなふべし真二つに割つたらば金太が出るかおたよが出るかそちらにござつて御覧じて存分に笑はしやれとぞしやべりける

(1) 来て見れば富士の高峯も高からずましてや裾野の山々を究知らぬ雲井の遠きに比ぶれば賤が屋の障子の棧に積るちりひじにも劣るべし・「ちりひぢ」は塵と泥。『古今集』「仮名序」の「たかき山も、ふもとのちりひぢよりなりて、あまぐもたなびくまで、おひのぼれるごとくに」を踏まえた表現。高い、高いという富士山の頂上でさえ、実際に来てみるとそれほど高くはない。まして、裾野の山々は、大空の高さに比べれば、そまつな家の障子の棧に積もる塵や泥にも劣るといふので、実際に見てみると想像したほどではないことをいつたものだが、「裾野の山々」が「没理想」の暗喩となつてゐる。つまり、その内容を聞くまえまでは、知らないものだから、「没理想」はさぞすばらしいものだろうと思ひ『早稲田文学』の「物好きの編輯係」が知りたいものだとか、小羊子の庵を訪ねたのだが、実際に聞いてみると大したことではなかつたとの卑下。なお「賤が屋」は暗に小羊子の庵をさす。

(2) 「白日の夢」と名づけたる小羊子が妄想の塊正体を見れば六才の頑童がこせへたる雪の達磨の生がたまりなるよりも小さかりき・「小羊子の来し方」の「見せぬ故に何とやらゆかしいやうに思はれて」を受ける。聞いてみれば、聞く前はすばらしいもののように思はれた没理想の論もつまらなかつたの意。

(3) 電気の発るまで掌摺りて・揉み手をする様をこのようにいつたもの。静電気を取り込むなど、西洋科学がさかんに移入された当時の時代が感じられる。

(4) 兼て用意の顕微鏡風呂敷解いて見だし程をはかりて見んとすれど固より幻のたぐひなれば微分子と微分子との間だつたなりたるやうにてつながらなく膝々⁽⁴²⁾として縦からも横からも根から焼点の据処なし・「焼点」は、焦点のこと。太陽光線を受けた虫眼鏡の焦点が台うと、焼けることから。この顕微鏡、微分子云々も、(3)と同様、科学が移入された世相を感じさせるが、ここでは、「没理想」をそのような科学で分析しようとしても、分析不可

能であるという暗喩になっており、自嘲しているようでありながら、西洋の理論をもつて大論陣を張る鷗外に対する皮肉にもなっている。

(5) かたじけなき、うにて随喜の落涙禁めがたし理由を聴けばといふ本文も「されば・石橋思案が『読売新聞』(明治二四・一一・一)で、「春廻舎大人が、こたび『編輯主任』と銘打ったる早稲田文学は、去る二十五日始めて其首巻を此世に出現したり。アラ尊うと！光輝燦燦然四方を射る、僕も亦随喜の泪にむせぶの一人なり、(中略)流石は専門学校の講義録、表紙の厚さ大したものなり」と揶揄したのを受ける。

(6) 灸処・灸を据えたと、効き目のあるところ。急所。ここでは小羊子の自惚れをくすぐるツボをさす。

(7) これはやつがれが一時安心の方便のかたまり・「没理想」とは大理想を会得していったものではなく、大理想を求め兼ねての当座の安心の方便に過ぎないというもの。逍遙にしたがえば、「造化の心」、すなわち宇宙の大理想は、その存在は想定されるが、現在の人知では不可知である。そこで、これを仮に「没理想」と名づける。この「没理想」は、「万理想の中に就いて、其の差別を棄て、平等の理を探るものである。この「没理想」に達するために、は、「一理想を棄て、没理想を理想とし、一理想を固執する欲有限の我を去つて、無限の絶対に達せんとするの欲無限の我を立て」ることが必要だが、そのための方便が「没理想」である(「没理想の語義を弁ず」二五・一)。乱暴に要約するなら、有差別の有限界を捨て、無差別の無限界に達しようというものであり、要するに一種の悟りである。こうした差別を捨象しようとする「悟り」が、平等・公平を標榜し、議論や主体的な評価を放棄する単純記実と結び付いているところに逍遙の論の特徴があるが、こうした考え方には、非本質的な有差別の現象世界への執着である念を滅却することによって、無差別で絶対無限の「真理」と一体化しようとし、それに行き詰まって、議論を廃し、「天然の理法」を研究しようとした二葉亭の思想との類似を見ることが出来る。(拙稿「二葉亭四迷『真理』の変容——仏教への傾倒——」前掲、参照)

なお、「方便」とのいい方には、個人的で、一時的なものに過ぎないという気持ちがこめられており、鷗外の批判をかわそうとする意図が認められよう。これについては、直後の「人さまに解らう筈もなく解ったとて益にたとう筈もなし」も同様。

(8) これが真理とみづから信ぜば滅黙して居られた義理で無し古来何処の国にも悟道徹底したやうなこいふて跡は野となれ山となれといはぬばかりに山箴して果た人も多いげに伝聞いたしたがそれは自尽の真中山・「没理想」は絶対の真理ではなくて方便に過ぎぬことを再確認するとともに、真理を会得したと称しながら世から隠れた隠者を非

難する。後に「釈迦耶穌孔子マホメットその他ひとりとして聖人といは、人で化益に力を尽されなんだ人は無し」というように、真理を会得したと思つたなら、個人的に満足して隠棲したりせず、世のためにそれを広めるべきだという考えである。このあたりに、逍遙の思想の社会性を見ることができよう。

なお、「自伝の真中山」は我侶の真ん中（二番の我侶）と歌枕の中山峠をかける。

(9) 峠まで通越して人間の義理の柵、大井河ほどに見残した薄情の骨頂ではあるまいか・峠まで通越して」は中山峠を通越すと我侶の真ん中を通り越すの意をかける。中山峠と「義理の柵」の「柵」から、「柵」があり、中山峠に近い大井川を引き出す。「薄情の骨頂」は「峠まで通越して」のつながりで、峠を越えたから頂という洒落。

(10) 釈迦耶穌孔子マホメットその他ひとりとして聖人といは、人で化益に力を尽されなんだ人は無し・「友人二葉亭四迷曾て小説を論じて曰く「小説家は先づ基督の如く釈迦の如き人と成べし、出世間の高きより下つて此世を觀察して小説を作るべし」(嵯峨の屋おむろ「方内齋主人に与ふ」明治二二・一〇)というように、二葉亭は、小説の目的は「真理」にありとして、文学者の営為を聖人になぞらえて考えた。ここで、逍遙が、「釈迦耶穌孔子マホメット」を引いて来たのも同じ文脈にある。

(11) 喘らず・「喘」の訓は「おそるる」「うれふ」だが、文脈、読みともにあわない。「慄」(おもんばかり)位だと通じがよい。

(12) 其の時の自信家の心持ちは楠廷尉に何劣るべきや七生まで生れかはりても此の志を貫くべし・楠正成と正季が湊川の戦いで戦死したとき、七生まで生まれ変わって、朝敵を滅ぼそうと誓つたという故事(『太平記』)を踏まえる。直前の、「異端雲霞と沸く娑婆の修羅闘場へ切つて出て衝いて衝いて衝きまくる叶はねば同胞の馬前にて討死する分のこと」もこれを受ける。

(13) 平田篤胤が神道談義、清浄教派が偏屈もかたよりたりといはゞいへ自ら信ずる所を行へる其操の高きこと八天をも摩すべし・平田篤胤(一七七五—一八四三)は、江戸後期の国学者、復古神道を唱えた。本居宣長没後の門人。神代文字口文の存在を主張した。『哲学大辞書』(大日本百科辞書、同文館、明治四五)に、「篤胤資性豪悍不屈、常に大道を宣揚するを以つて己が任となす。嘗て門弟子に示して曰く、道をとき道を学ぶものは、人の信ずる信ぜぬに少しも心を残さず、仮令一人も信じて有まいが、マ、ヨ独立独行と云ふて」「皇神の道の趣は、清浄を本として汚穢を惡ひ、君親には忠孝に事へ、妻子を恵みて子孫を多く生殖し(中略)かゝる神道の思想を海内に普及し、天下に宣揚せんとせり。」「哲学、一人で操を立て一人で真の道を学ぶ」とある。

(14) カライルの談論・(Thomas Carlyle) (一七九一—一八八二) イギリスの批評家、歴史家。エマーソンと交流し、ドイツ観念論の影響を受けた。「万物は精神の象徴であり、国家や宗教、道徳などは、人間が一時的にまとう衣装に過ぎぬとする「象徴の哲学」を説いた。」「彼は社会改革の手段として革命を支持し、聡明な英雄的指導者の必要を説き多大の反響を集めた。彼は、功利主義と正当的キリスト教にひき裂かれたヴィクトリア朝時代の精神的空隙を埋め、一世の予言者として大きな影響を与えた。」「(増補新訂新潮世界文学辞典「新潮社、一九九〇」参照。「談命」は『日本国語大辞典』、『大漢和辞典』に見えないが、社会の運命を談ずるの意か。

(15) ミルトンが新教的天地想・(John Milton) 一六〇八—一六七四、イギリスの詩人。「盲目の彼は口述によつて人間性を代表するアダムとイヴの罪と罰と、そしてなおそこに救いの可能性のあることをうたつた大叙事詩『失楽園』(六七)を作りあげた」という。(『新潮文学大辞典』) そのような清教徒的な信仰に支えられ、神の恩寵の予感される世界をいうものだろう。

(16) 金輪際より生ぬきたるやうの自信の獅子吼・「金輪際」は、仏教で地層の最下底のところをいい、無限に深いことをいう。「獅子吼」は、仏の説法を獅子が吠えて百獣を恐れさせる威力にたとえる。真理を説いて発揚すること。

(17) 巨獣の尻尾搔撫て忽ち巨象を知れりと傲し・これも「群盲象を撫でる」を踏まえたものか。

(18) 之を虎豹と比べても見ず犀獅子水牛海馬のたぐひ其他巨なる獣は新古大陸に数多かるに絶えて比照の勞をも取らで我れはもはや大象の筋肉を刮き骨を折いて甚深の秘密を證得せり・他人の意見に耳を傾けようとせず、自分の意見だけを正しいと盲信して独断的な批評を展開していた当時の批評家を批判したもの。

(19) 茶毒・不明。「茶」は、「茶にする」などで使う、ばかばかしい、不真面目な、ふざけたといった意か。

(20) 若夫純理の關ひは智慧啓発の大機關一日も無かる可らずわが『白日夢』の塊もそが尽る期無からんを望めり・逍遙は、議論全般を排撃していたのではない。(自分が批判しているのは) 方今新聞、雑誌などに散見する、かたよりのたる小議論を指せるなり。其の根底に、一系の定まれる哲理も無うして、一時の感の浮べる俚に或ひは好悪に駆られて、衆他を排し、或ひは狹隘の経験を尺度として、大いなる人間を是非するが如き頑陋偏僻の小理想を謂へるなり。」「(鳥有先生に答ふ「其一」)

(21) 古今の物識といふ物識学者はおふむね懷疑家ならぬは無く後に大自信の人となりし学者も多年懷疑の境にありて心眼を森羅の法界に馳せ沈思冥想の果成りて漸く理想を作りしなりとか・カライルも科学的世界観の影響によつて宗教的懷疑に陥っていたが、ドイツの観念論哲学や文学を研究し懷疑から脱したという。(『新潮世界文学辞典』)

(22) シェルリ・シラー (Friedrich von Schiller) (一七五九—一八〇五) ドイツの詩人、劇作家。ゲーテと並び、個性解放の文学運動疾風怒濤を代表する。

(23) これ皆理想の詩歌にしていと広き意味にていふ抒情詩といふは大むね此たぐひなるらんかし。「鳥有先生に答ふ」其三(明治二五・三)にも「理想を宗とする者は、我れを尺度として世間を度り、自然を宗とする者は、我れを解脱して世間相を写す。前者は総称して叙情詩人といふべく、後者を総称して世相詩人といふべし。」とある。

(24) そが形は古しへのエポスの形にしたらんもドラマの形にしたらんもあるべけれど所謂上乘のドラマの形といふ際はかゝる者流の作には見えず・エポス (epos) は叙事詩。ドラマ (drama) は劇詩。逍遙は、「シェイクスピア脚本評註緒言」(明治二四・一〇)で、「バイロン、スキフトなどの作の、或人に喜ばれて、他の人に嫌はるゝとは、大いなる相違なり。」と述べているが、鵠外によつて批判された。

(25) 八万煩惱の繁きに撃たれて眼くるめき・「八万」は「八万四千」。仏教で数の多いことをいう言葉。「眼くるめき」は煩惱に撃たれて目がくらむの意だが、次の「天」にも、目がくらむほど高い「天」の意でかかつて行く。

(26) 天の一月影万水に浮ぶなりと口ではいへど・「盲安杖」に「釈尊は三界の衆生を一子のごとく、あはれみたまふなり。忝にあらざるや。一如の水ながれて万波とわかる。譬ば天上の一月、万水に移るがごとく、人々の性又是にことならず。」とある。「天の一月影万水に浮ぶなり」は、一切の衆生に仏の性が有るという意味。口では悟つたようなことをいうけれども、ということ。

(27) 無底の井戸にをちこちの・「をちこち」は、井戸に落ちるの意と「あちらこちら」の意味をかけている。

(28) 餓鬼悪太郎・「餓鬼」は、「無底の井戸」に落ちたということで、地獄に落ちた「餓鬼」と、あちこちの子供の意味をかける。直後の「幽霊」が出て来るのは地獄の「餓鬼」からの連想か。「悪太郎」は、いたずら者。

(29) 魂の無い奴と後ろに目無き一ツ目小僧が悪たい幽霊のやうにお手前は腰が無いとぬかざはぬかせ・「悪たい」は悪口。落語の「お化長屋」に、強がりという男をおどろかさうとして、按摩に布団から上半身を出させ、布団の下の方には、別の男が潜り込んで足を出し、大入道に見せかけようとするが、親方が現われたので、大入道の足腰の役をした男も他の男たちも逃げてしまい、取り残された按摩が親方に「お前一人を置きツ放しにして行くなんツて、余り足腰のねへ奴ちやアねへか」といわれて、「へエ左様でござんせう、足腰は先程皆逃けて仕舞ました。」と答えるオチがある。ここの文脈には、そのまま重ならないが、一ツ目小僧から幽霊を導き出し、「お化長屋」のオチと同様に、根性がないの意の「腰がない」に、幽霊に下半身がないという俗説を掛けたものだろう。

(30)

迷ふといふは悟の裏道、煩惱即ち菩提樹の此葉の生ひ長ちて花咲かん日を俟つ・「葉」は、通常、切り株から出る芽という意味だが、つみ、わざわざという意味も持ち（『大漢和辞典』）、ここでは両者を掛ける。

「菩提樹の此葉」とは、悟りの心に生じた罪であり、したがって「迷ふといふは悟の裏道」ということになる。そのような罪の芽であるけれども、それが成長して悟りの花を咲かせる日を待つ、ということ。

(31)

これは其後菩提樹が億万由旬延びく大天上に届かん時にちちらおちら攀昇らん其用心の方便なり・「由旬」は、仏教語。古代インドの距離の単位。一由旬は帝王の軍隊が一日に進む距離だという。逍遙は、「大理想」をつかみ兼ねた「方便」として「没理想」を唱え、「記実」的な批評を主張した。つまり、さまざまに紛糾する文壇の議論の現況にあつて、好悪によるかたよった議論を排しつつも、自己自身懷疑の境にあつた逍遙が、議論に対する懷疑もまた「悟の裏道」と考え、とりあえず判断を保留しつつ、将来のしかるべき時に備え、帰納によつて理想を得るための材料を集めるのが当面の自分のなすべきことであるという所信の表明。

(32)

菊五郎が舞台で用ふる竹梯子の短きよりも短くして・『続統歌舞伎年代記』（田村成儀編著、鳳出版、昭和五一）の明治二五年一月の記事に「菊五郎は今度我が勤むる梯子乗に就て参考のため毎年一月四日警視庁前にて執行せらるゝ消防出初式を一覧する予定なりしも折悪く横浜葛座へ出勤中とて本意を得ざりしかば同日同港警察署前にて挙行したる出初式を見物なし実地模写の研究に資し夫れより此場を使用する小道具類を註文なし来たりたるが」云々である。これは、一月一日より、歌舞伎座で演ぜられた『塩原多助一代記』の切狂言梯子乗のためであつたが、この梯子乗は「非常の人氣となり当り振舞をなす程の盛況」となつたという。

(33)

一葦の葉船・葦船というと、ヒルコを乗せて流した船が想起されるが、ここでは、単に葦の葉を船に例えていったもので、ごくささやかな船という意味にとりた。

(34)

石見銀山鼠取・石見銀山の銀の副産物砒石を使つた殺鼠剤で近世盛んに用いられ、明治時代まで売られた。鼠取は、猫には効かないことから、次の「泥棒猫を禦ぐに由なく」を導く。「夫れ物の用はその主の性に応じて成るものなれば」の続き。

(35)

雀を威す山田の案山子弓ひきしぼり立ちけらしが小山田太郎が武者目には御大將が咳の一つばかりの効目もなかりき・「小山田太郎」は、不詳。「山田の案山子」からの連想で、武士の名をつけたものであろうか。ともかく、案山子は雀を威すのには役立っても、別のものに対しては役立たない、というもので、(34)と同じ文脈。

(36)

われらが方便門もほんのわれらの犬くゞり羊が通ふ背戸の小途のむさくろしさ・「犬くゞり」は垣根などで、犬が

くぐる穴。「羊」は逍遙（小羊）の比喩。自分が唱えた「没理想」は、自分自身の方便に過ぎず、他人には役立たないということ。したがって、「世の貴人の目に触れんや語るとも用なかるべし」となる。

いふな維摩の室ならなくに無言三昧・維摩（ゆいま）は、釈迦時代の行者。文殊を始めとする菩薩連が病氣みまいに維摩の方丈を訪れ、不二の法門について問答した際、維摩は、文殊師利との問答で、不二の法門は不可説のものだとして、ただ一黙を以てしめたという（『禪学大辞典』）。この故事を受ける。「くならなくに」は「くでないのに」の意。

達磨に似たる夢のかたまり・達磨大師が少林辞で面壁座禅九年にして悟りを開いたという故事を受け、達磨人形をかける。直後に「ころがして」とあるのは、達磨人形が念頭にあるため。

蘿月・「らげつ」。つたにかかる月。

琴の音のいとゆかしくぞきこえける・鵬外の論の比喩。

我れ若し此塊をまろばしてかばかりの道来らずば此声聴くべき便なかりさるにても只管に沈黙と思ひ込みしは我しらず我はめの病を長ずべきいとあしき縁なりき・没理想という言葉を主張しなかったらば、鵬外の批評を受ける機会がなかっただろう。だから、沈黙ばかりがよかったと思つたのは、自己満足に陥る間違つた考え方であった。低姿勢のうちに、鵬外の批判を歓迎しようとする言葉。

真二つに割つたらば、金太が出るかおたよが出るか・「金太」は金太郎、「おたよ」はおたふく。どちらも、いわゆる金太郎飴の図柄で、それゆえ「真二つに割つたらば」ということになる。自己のいう没理想の正体を明らかにし、それを論争の俎上にのせようというもので、ここには論争を受けて立とうという積極的な逍遙の姿勢がうかがわれるだろう。